

石原力先生を悼む

蔵方 宏昌

私が石原力先生を初めて知ったのは1972(昭和47)年10月に発行した雑誌「産婦人科の世界」である。24巻10号に「日本の帝切120年」の特集記事が載っていた。先生は「日本における産科学の発達と帝王切開」という論文を寄せていた。先生が中央鉄道病院産婦人科主任医長から虎ノ門病院産婦人科部長に転任されてから2年後である。私もこの頃産婦人科史に関心を持ち、その後医史学会に入り先生の発表には特に傾聴するようにした。縁あって虎ノ門病院産婦人科の当直を月に数回するようになり、夕方病院に行くと先生が待っておられ、二人で話す機会を持った。

石原先生の研究は緻密で、大雑把な私は大変啓発された。1980(昭和55)年に先生は緒方正清の二著『日本産科学史』(大正8年刊)と『日本婦人科学史』(大正3年刊)を復刻した折、この二書に正誤表、事項索引、人名索引、文献索引、緒方正清略伝を書き、古代から1980(昭和55)年までの日本産科婦人科学史年表を載せた。事項・人名の索引では読み仮名を付してあり、192ページに及び、一冊の著書となっている。続いて2年後、ハロルド・スピアート著『図説産婦人科学の歴史』を翻訳して出版された。

またこの年、巴陵宣祐訳『古代医術と分娩考』(昭和6年刊)を復刻。原著者ハッガードと訳者巴陵宣祐の略歴と業績、『古代医術と分娩考』の成立と特徴、今日的意義を記した。「医学史の記述を自然科学的正統医学に限定せず、まったく系列を異にする異端的医術をも含めていることで、これは内容を興味深くし、また豊富にするというだけではなく、先人達が当時の文化意識に応じて造り出した、様々の形式の治療行為をその根底の持つ経験・知識の集積された思想材が医学ないし医術であるにとらえているように解されるのであ



石原力先生

る。」と今日的意義を記している。

この視点に立って先生は「岡山藩における農家子弟と医業」「縄文土器・土偶の産科学的考察」など民俗学・考古学的な発表をされている。

1984(昭和59)年に『西洋産婦人科翻訳書集成』江戸時代編2巻を出版された。江戸時代に出版された翻訳書だけでなく、未出版(写本)の翻訳書も収載しているので、産婦人科史の研究に欠かせない。1986(昭和61)年賛育会病院病院長、1995(平成7)年賛育会清風園診療所長となっても『西洋産婦人科翻訳書集成』の仕事は続けられ、明治時代篇も編纂された。(江戸時代篇と合わせて、科学書院から2009年にマイクロフィルム版、

DVD版、テキスト版が出されたという)

賛育会病院時代の1987(昭和62)年6月12日に建立した「本邦帝王切開術発祥之地」記念碑については、実行委員長として奔走された。発案から関係各機関や関係者との折衝、碑の撰文、除幕式、記念式典、記念講演会、資料展示会、記念誌編集など先生がいないと出来なかった事業である。

先生の最後の仕事は西洋の産科史を集大成しようとした「助産婦の歴史」である。これは1983(昭和58)年6月から2013(平成25)年7月まで雑誌「Perinatal Care」に連載された。

本会の監事を先生は2000(平成12)年から2012(平成24)年まで務められたが、その仕事も正確で、監事としての提案もされた。先生の後を受けて今、私は監事を引き受けているが、この点も先生の足元にも及ばない。

昨2015(平成27)年4月29日89歳で先生は亡くなられた。5月末に連絡を受けた私はまた偉大な先達を一人失った。

道なかば 先達一人 また逝きて

五月雨強く 降り降りしきる